

街区公園の有効活用に関する一考察：子どもの遊び空間および地域福祉の視点から

著者	川北 典子
著者所属(日)	平安女学院大学人間社会学部福祉臨床学科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	6
ページ	9-16
発行年	2006-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001230/

街区公園の有効活用に関する一考察

— 子どもの遊び空間および地域福祉の視点から —

川北 典子

1. はじめに

「公園」は、地域のなかで、種々の役割を果たしてきた。子どもの遊び場としてはもちろん、住民の憩いの場として、もしくは社交場として、時には祭りや運動会、花見など季節ごとの行事を遂行する場所として、さまざまな場面で利用されてきた。それらのいかなる場合においても、公園は、地域住民の生活に密着した存在として、なくてはならない場所であった。

だが、1993(平成5)年6月には都市公園法施行令が改正され、公園をめぐる状況にも少なからず変容が見られる。改正の必要性については、「都市化の著しい進展と国土・都市構造の変化、高齢化の進展、国民の余暇ニーズの多様化・高度化、また地球的規模での環境問題の顕在化等国民をとりまく状況や国民の価値観・ライフスタイルは大きく変化しており、こうした経済社会の変化に的確に対応し、国民が豊かさを実感できるゆとりとうるおいのある都市環境を形成するとともに、自然と共生した安全な都市や国土の形成を図るため」⁽¹⁾などの理由が挙げられているが、それらは「地域」に対する関心が高まってきたことの現れでもあろう。

本稿では、そのような時代のニーズに適応した公園について、とりわけ次世代育成を中心としたまちづくり・地域づくりの視点から考察を試みる。なお、本稿における街区公園とは、前述の法改正によって新たに規定された公園の種別名称であるが、その設計指針は次のように示されている。

〔街区公園〕 地区の実情に合わせ、児童の遊戯、運動等の利用、高齢者の運動、憩い等の利用に配慮し、遊戯施設、広場、休養施設等を最も身近な公園としての機能を発揮できるよう配慮するものとする。

2. 公園の歴史と役割

(1) 公園前史

公園が行政上制度化されたのは、1873(明治6)年のことであるが、それ以前にも種々の様式で、人々の生活のなかにやすらぎやくつろぎの空間は存在していた。江戸には、度重なる大火に対応する防災機能の役割を果たす「火除明地」と呼ばれる空間が意図的に創られていたという⁽²⁾。そこでは、通常は植木市が開かれたり、簡易な建物の飲食店が経営されたりしていた。すなわち、人々が集う要素を備えた空間として機能していたのである。

また、江戸時代には、岡山の後楽園や水戸の偕楽園など、多くの大名庭園が造られており、名園として今に残されている。それらは、時代の要請によって軍事的役割を備えていたことがひとつの特徴ではあるが、同時にその場を使用してのレクリエーション機能や、そのような空間の存在自体が人々の精神の高揚に寄与するという側面も兼ね備えていた。さらに、要人たちをもてなす社交の場としても機能していたと考えられるし、また薬草や野菜の栽培園としての利用から火薬の実験場にいたるまで、多角的な活用がなされた。

(2) 明治期の公園

1873(明治6)年、太政官布達第拾六号によって、公園の制度が確立した。これは、「三府ヲ始、人民輻輳ノ地ニシテ古来ノ勝区、名人ノ旧跡等是迄群集遊観ノ場所、従前高外除地ニ属セル分ハ永ク万民偕楽ノ地トシテ公園ト相定ム可キニ付府県ニ於テハ右地所ヲ選ビ其景況巨細取調図面相添ヘ大蔵省ヘ伺出ヅベキコト」となっており、明治政府が行なった新政策のひとつであった。ただし、そこには、幕府ゆかりの寺社地を含む土地や、地方大名が所有していた高外除地の後始末の意図が含まれていたのではないかと、進士五十八は推測している⁽³⁾。

通説では、オランダ人医師ボードウィンが明治政府に進言し、布達第拾六号が出たとされているが、進士は、当時の日本人の生活様式や水準から考えて、新政府ができて6年という早い段階で、公園の制度化を進めるのは不自然であると指摘し、徳川家ゆかりの土地の処分および新政府に対する東京市民の理解獲得といった一石二鳥のこの方法をとることにしたのではないかと述べているのである。確かに、財源の問題等も考え合わせると、明治政府が幕府ゆかりの寺社地までもを国有地にするこの意義は大きかったと思われる。

その後、1903(明治36)年には、東京市に日比谷公園が開園するが、その建設にあたっては、明治20年代からおよそ10年をかけて、8つの設計案が検討され、ようやく9つめの東京帝国大学林学科教授の本多静六案が採用された。市民が公園に対して幾許かの期待を抱き始める時代となった所以であろう。ドイツ様式が採り入れられた日比谷公園は、東京の代表的な中央公園となり、やがては日本全国の中央公園のモデルとなっていった。

(3) 大正期の公園

1919(大正8)年には、都市計画法が公布され、それによって公園は都市計画施設として、計画および整備が行なわれるようになる。また、1923(大正12)年には関東大震災が起こり、公園の防災機能が再認識された。そして、これを契機として、東京では、いわゆる下町を中心に、55ヶ所の震災復興公園が整備されたのである。それらは、いずれも西洋庭園風の造りが施され、大正デモクラシーを象徴するかのようなモダンでハイカラな様式を備えていたという⁽⁴⁾。

さらに、震災復興公園のもうひとつの特色は、小公園52ヶ所が小学校とセットで配置されたことであった。小学校の校庭と公園の広場の一体的利用が推進されたのである。すなわち、日中は小学生が公園広場も含めてスポーツを行なう運動場として利用、夕方から夜間にかけては、高齢者を始めとする地域のおとなが主体となって活用された。むろん非常時には、防災の砦として一体化利用される予定のものであった。日本の学校教育の歴史のなかで、小学校は特に、地域住民に開かれた施設として機能してきた。屋上には防火楼が据えられ、地域における種々の行事の会場とされ、住民自治のシンボリック的存在とされてきたのである。なかには、学校内に地域住民がいつでも利用できる図書館を建設していたところも見られる。そのような小学校と公園の一体化は、各地域の実情から考えても、ごく自然なことであったのだろうが、現在の閉ざされがちな学校機能をめぐる状況を考え合わせると興味深いものがある。

また、それより先の1917(大正6)年、明治神宮の内苑が近代造園学にもとづき着工された年には、東京市外目黒に、児童教養研究所および児童相談所が開設された。これは、日本で最初の固有の建物を持った児童相談所として知られるが、附属児童遊園を兼備していたことも特筆すべきことであろう。その建設には、児童文学者として著名な巖谷季雄(小波)がかかわっており、目黒区権之助坂下の2500坪の借地に、同研究所、相談所および児童楽園と称される前庭が設置された。児童楽園は、「娯楽のあいだに児童の体力知力の発達」⁽⁵⁾を助長すべく設備され、運動場、すもう場、すべり山、植物園、動物園、養魚池、地球池、測候所、水田、苗圃、精米場などが配置された。水田や精米場までが設置

されたのは、『一粒の米の中には神さまが宿っている』という、米をたいせつにした当時の、子どもの精神教育のため』⁽⁶⁾であったという。地球池は、東半球と西半球に二分され、それぞれのなかに大陸の形を造り、海洋の部分には水が張られた。測候所には、日時計、地温計、雨量計、風速計とともに、高いポールの頂上に東西南北を示す矢と鳥がついていた。

これらを管理していたのは、児童教養研究所理事で東京帝国大学講師の久保良英であったが、当時、児童遊園はまだ珍しく、とりわけ心理学者が設計・運営したものとしては、これが唯一のものであったといわれる⁽⁷⁾。後にこの児童相談所の影響を受けて設立される大阪市立児童相談所にも、子どものための遊具を備えた広場が設けられていることから、このような公園の環境そのものやそでの遊びが、子どもの身体的精神的発達に多大な影響を及ぼすことが、この時期認識されつつあったことがうかがわれる。

(4) 昭和期の公園

公園関連の行政措置について見ると、1940(昭和15)年に都市計画法が改正され、「緑地」が法文化されている。ただし、都市公園法が成立するには、1956(昭和31)年まで待たねばならない。一般的には、公園が市民の生活に必要な施設であることが、まだ認識されていなかった所以である。

太政官布達第拾六号が出されてから、80年以上も経て、ようやく都市公園法により、公園は、行政上においても重要視される施設となった。そして、1964(昭和39)年の東京オリンピック、1970(昭和45)年の大阪万国博覧会は、新たな大規模公園建設に少なからず影響を与えた。一方で、それらにともなう経済活性化によって、都市の交通事情も大きな変貌を遂げ、「子どもの遊び場」確保の機運が生まれた。さらに、1955(昭和30)年から始まった住宅公団の団地づくりが定着し、児童公園等の整備も進められた。公園のデザインも含めた総合的なまちづくりが考慮されるようになったのである。

その後、1972(昭和47)年には、第一次都市公園等五ヶ年計画がスタートしたが、これによって公園予算が計上されるようになったことの意義は大きい。そこには、経済の高度成長化にともなう環境の悪化に対し、国民の関心が増大し、自然保護や緑化運動が重要視されるようになったという背景が見られる。公園の機能について、関東大震災後の防災中心の考え方から、緑地の確保という環境面への配慮に移行してきたといえる。また、1980年代に入ると、いわゆるエコロジーブームにのっとり「緑」「水」「大気」などに関心が寄せられ、さらに「都市美」「景観」などの概念が付加された。各地で特色ある公園づくりが展開され、そのなかでは、地域振興および活性化も重要なキーワードとなった。

前掲の進士五十八は、今後の公園づくりについて語るなかで、欧米の模倣から始まった日本の公園づくりも、「日本の風土や生活文化・日本人のライフスタイルに対応して、市民感情にピッタリくるほんものの公園づくりに向かうべき」⁽⁸⁾であろうと述べている。すなわち、地域性、地域らしさを工夫してあらわすことが大切であり、それには住民参加が不可欠であるといえよう。

3. 子どもと公園

(1) 子どもの発達と遊び

近年、遊べない、もしくは遊ばない子どもが増加しているといわれる。本来、遊びは、子どもの生活そのものといっても過言ではなく、遊びのなかで子どもは生きる力を身につけてきた。具体的には、次のような要素が考えられる。

- ・身体および運動機能の発達
- ・社会的な認識および態度の育成
- ・知識や技術の習得

- ・言語能力および思考力の獲得
- ・想像力および創造力の育成

現代社会において、子どもの遊びを貧弱にさせているものは、三つの間、すなわち「時間」「空間」「仲間」の欠乏であることは、しばしば指摘されてきた。とりわけ都市の子どもたちにとっては、悪化する交通事情や犯罪の増加、住宅等の開発にともなう自然破壊などによって、遊び場の著しい減少が見られる。だが、遊びの成立に必要な三つの間のうち、「時間」については、学歴社会における塾や習い事の問題、教育システムの問題など、現代社会の膨大な変革を要するものであり、「仲間」の減少も、少子化の問題を含めてそれに派生する部分が大きい。

それらに比較すれば、「空間」の問題は、地域住民がともに考えることによって、わずかながらでも解消できるものなのではないか。子どもが遊びを満喫できる空間は、地域のおともも集い、活動を広げていける場として機能する可能性を秘めている。地域の教育力を活性化させるうえでも、公民協働の公園づくりを実施することの意義は大きいと思われる。

(2) 大正期の児童公園指導員

関東大震災は、東京に震災復興公園の建設を促したが、同時に児童公園についても新たなシステムを導入させた。日比谷公園が本拠地となり、被災した多くの子どもたちの健全育成を目的として、児童指導の専門機関が発足したのである。当時の日比谷公園には、1000平方メートルの児童公園が設置されていたが、ブランコ1基、滑り台2基、砂場が1ヶ所あるのみであった。そこに、毎日遊びに来るのべ1000人の子どもたちに対して、遊びの指導を行なう児童指導員が派遣されたのであった。指導員は、遊具の改善・発明、紙芝居や口演童話の実演、音楽会などのイベント企画なども行ない、後には、東京市内の多数の小公園にも巡回指導を実施したといわれる。

大正初期にアメリカに留学を果たし、帰国後YWCAにおいて児童指導の仕事に就いていた末田ますは、自著『児童公園』のなかで、遊びの指導員に携わった経験を克明に記している。前例のない児童指導員の仕事は、末田にとって困難の連続であったという。当初は、敷地も狭く設備も不十分であった。末田は、「たつた一人で、毎日、日比谷公園の一隅で、明日の発展を期待しつつ子供達と遊ん」⁽⁹⁾でいたのであった。そして、そのような困難な状況においても、彼女は、アメリカで学んだ知識と技術を駆使して、目の前の被災児たちと日々向き合うことに全力を尽くしていた。

また、末田は、児童遊園での指導法についてもまとめているが、児童遊園における指導法と学校におけるそれとの違いについて、「学校に於ける指導は総べて具案的且継続的であり、いはゞ形式的であると思はれるが、之に対して児童遊園に於ける指導はその場その時に応じて方法が講じられるいはゞ偶発的な、形式を持たないものである」⁽¹⁰⁾と述べている。すなわち、児童遊園においては、毎日決まった子どもが決まった時間にくるわけではなく、性別や年齢も異なるので、臨機応変に対処できる力量と、子ども一人ひとりに目配りできる能力が指導員には求められることを説いている。

そしてまた、末田は、子どもたちとともに遊ぶなかで、彼らが自らの力で自由に遊ぶ能力を有していることを発見する。そこで、「自由にして自ら自治的に」活動すべき子どもたちが、徒におとなの手によって窮屈なところに追いやられてはならないと指摘した。さらに、当時、各地で結成されつつあった少年団等の活動も含めて、子どもの校外生活の指導は、「国民学校と我々とが緊密に連絡して努力しなければならない」⁽¹¹⁾と述べ、子どもをとりまく諸機関が適切な連携をとることの必要性を提唱している。

末田がアメリカで習得した数々のゲームについての指導法やいわゆるネイチャースタディ等の知識、そしてまた、新たな遊具の開発に挑んだ志は、その実践記録のなかに生き生きと描かれ、現代においても新鮮に感じられる。それらは、近年、子どもたちの遊び場でその活動を支援するプレーリーダー

の役割につながるものであろうし、欧米だけではなく、大正期の日本においても実践と研究がなされていたことの意義は大きい。

(3) 冒険遊び場とプレーリーダー

冒険遊び場はプレーパークともいわれ、「子どもが自由に遊べる場」として、地域の親が中心となり運営されている。欧米では歴史も長いですが、日本では、1975(昭和50)年に、ヨーロッパの冒険遊び場で生き生きと遊ぶ子どもの姿に感銘を受けた人々が、東京都世田谷区に行政から土地を借り、期間限定で開設したのが最初だといわれている。その後、1979(昭和54)年には、国際児童年の区の事業として、世田谷区内の羽根木公園の一角に「羽根木プレーパーク」が開設され、それらの活動をモデルにしながら全国に広まっていった。

プレーパークは、子どもが主役の遊び場であり、「自分の責任で自由に遊ぶ」という基本理念が定められている。近年の街区公園にしばしば見られるような禁止事項の書かれた立て札は一切見当たらない。ただし、そこには、住民たちの事故に対する防止体制が確立されているという前提がある。したがって、プレーパークには、子どもたちが自分の責任で遊ぶことを見守るおとなの目が不可欠であり、プレーリーダーと呼ばれるおとなが常駐している。

プレーリーダーは、指導者ではなく、常に子どもの目線に立ち、子どもの遊びを支援することのできるおとなである。家庭や学校以外の子どもの居場所として、そのような遊び場を考えると、プレーリーダーは、カウンセラーやソーシャルワーカーの役割をも担うことになる。現代の子どもが、自分らしく存在できる場所を必要としており、それらの整備が急務であることはしばしば指摘される。遊びという子ども本来の力が自然なかたちで発揮される活動をとおして、子どもが身につけていくものの大きさを考えると、彼らの思いに真摯に向き合うことのできるソーシャルワーカー等としてのプレーリーダーの役割には大きな期待が課せられる。

(4) 子どもの居場所としての公園

近年、各地域で、子どもの居場所づくりについて検討される機会が多くなっている。文部科学省も、子どもの居場所づくりを推進させるための施策を講じ始めた。

かつて子どもの居場所は、さまざまなおとなくにあった。家庭や学校は当然のことながら、種々の遊び場、近隣の家庭や友人の家庭、そして、危険を伴う可能性があるためおとなから禁止されている場所など複数の空間を、子どもは自分の居場所と定めていた。子どもたちにとって魅力ある居場所は、おとなに定められた空間ではなく、自らが主体的に見つけ出したところであるし、獲得に苦労した場所ほど愛着を持って活用できたのである。

だが、現代の子どもたちは、居場所を求めて右往左往している。なかには、おとなの用意した居場所に居心地の悪さを我慢しつつ逃げ込んでいる子どもや、自分自身で居場所を求めることすらあきらめてしまった子どもの姿も見られる。そして、それらを憂えたおとなが、子どもの居場所について考慮せざるをえない状況になったのである。

現状から考えて、家庭や学校以外の子どもの居場所としては、地域に求めるしかない。次世代育成支援施策の一環としても、児童館や図書館、博物館など、子どもが利用する施設の整備が各地で進められている。地域のそのような施設が充実していくことは、意義のあることであるし、むしろ遅すぎたともいえる。たとえば、子どもが、児童館の職員に、遊びをとおして家庭や学校で抱えている問題を伝えることのできる姿が望ましい。また、図書館に、利用する一人ひとりの子どもの興味・関心や抱えている問題を理解することのできる司書が配置され、それらを踏まええたうえで本の紹介ができれば、子どもにとって、こんなに居心地のよい空間はないだろう。

だが、いかに施設設備の充実を図っても、それだけで子どもの居場所になり得るはずはない。それらの施設が、真に子どもの居場所として機能する条件は、やはり、そこに常に子どもと向き合い見つめるおとなの眼があることであろう。子どもたちを管理するのではなく、ましてや指導するのでもなく、子どものありのままを見守り支援していくおとながいてこそ、それらの施設が居場所となりうるのである。

それらの施設のありようから考えると、公園はあまりにもオープンなスペースであるといえる。したがって、本当の意味で子どもの居場所として働くことは難しい空間であろう。また、本来なら、子どもの遊びは自由な活動であって、おとながかかわることの方が罪悪であるとも考えられる。しかしながら、現在の公園を子どもたちの心地よい居場所として活用していくためには、あえて地域のおとながかかわることの重要性を思う。それは、単に遊具の配置や点検といった環境整備の役割だけでなく、その子どもが抱えている問題にともに向き合い、悩みや苦しみを共有してくれるおとなの存在にほかならない。

4. 地域における公園の意義と役割

前述したように、地域の公園が、子どもにとって重要な遊び場となることは自明である。だが、1993（平成5）年の都市公園法の改正によって、児童公園という名称が廃止されたように、現代の地域における公園は、必ずしも子どもだけのものではなくなっている。法の改正前は、「もっぱら児童の利用に供することを目的とする都市公園」を「児童公園」と定義していたが、「高齢化社会の進展、余暇時間の増大等の社会情勢の変化に伴い、公園配置計画上最も身近に存在する公園である当該公園の役割が重視されてきており、児童の利用に限らず、広い年齢層の住民による散策、休養等の日常的な利用に供される場となるべきである」⁽¹²⁾ことに鑑み、改正後は、「高齢者が日常的に利用できる公園」⁽¹³⁾に重点を置いていることがうかがわれる。これは、街区公園は利用者を特定しないとしながらも、高齢者の行動半径を、児童公園の誘致距離 250m と同等と見なし設定していることから明らかである。

公園に乳児から高齢者まで幅広い年齢層の利用者がおり、数々の利用法があることは言うまでもない。すべての住民の想いを実現するには、街区公園のような規模では困難なことかもしれない。だが、そのような身近な生活に密着した規模の公園であるからこそ、逆にさまざまな想いを結集することが可能になるのではないか。

大阪市では、「みんなのわくわく公園づくり」と称して積極的な広報を行ない、次のような流れで、公民協働の公園づくりを実施している。

- ① 公園計画の最初の段階から、一般市民に呼びかけてワークショップを開催し、計画地や街なみの観察を行なう。
- ② その後、グループに分かれ、カードや模型を使って、どのような公園にしたいかをイメージし、アイデアを出し合う。
- ③ 計画をまとめ、実現につなげる。

ワークショップのなかで、日頃の住民の意見や考えが十分に話し合われることによって、地域が抱える課題を探ることも可能になる。公園を地域の核として捉えるとき、住民の想いがその公園にどのように反映されるかは、すなわち地域づくりのなかで、子どもから高齢者まで一人ひとりの住民のニーズがどれだけ実現できるかを表しているのであるといえる。

5. おわりに

滋賀県 M 市の地域福祉計画策定にかかわった折に、各地区の住民から必ず挙げられる課題のひとつが、少子化にともなって地域で子どもの遊ぶ姿が見られないというものであった。子どもの遊びを

めぐむ問題について、緊急にその手当てを講じる必要があることは多方面から指摘されている。地域ぐるみでの遊び場づくりは、その第一歩となるであろうが、そこには、子どもの目線で、子どもとともに遊びを楽しむおとなの存在が不可欠である。おとなが、一方的な思い込みによって、単なる型どおりの広場を用意したところで、子どもの活動を支援することができないのは自明であろう。

法改正によって、街区公園が、幅広い年齢層の人々に供されるようになったことの真の意味は、幅広い年齢層の住民が、ともに楽しむことのできる場が提供されたということであろう。したがって、公園づくりという活動をとおして地域住民の想いが結集された後は、その場所を使って、どのような地域づくりがなされていくかが重要な問題となる。

例えば、地域のなかに子どもの遊び場を整えることで、核家族の母親が地域の高齢者に育児相談をしたり、高齢者への理解を深めたりすることが可能になる。また、そのような場においては、プレーリーダーのようなソーシャルワーカーの存在も、種々の示唆をあたえてくれる。それらの具体的な事例にあたって考察を深めることを今後の課題としたい。

【註】

- (1) 公園緑地研究会編『改正 都市公園制度 Q&A』ぎょうせい、1993、頁3
- (2) 進士五十八、他著『公園づくりを考える』技報堂出版、1993、頁56
- (3) 前掲書(2)頁74
- (4) 前掲書(2)頁84～85
- (5) 安田生命社会事業団編『日本の児童相談』川島書店、1969、頁87
- (6) 前掲書(5)頁87
- (7) 前掲書(5)頁89
- (8) 前掲書(2)頁102
- (9) 末田ます『児童公園』清水書房、1942、頁6
- (10) 前掲書(9)頁11
- (11) 前掲書(9)頁13
- (12) 前掲書(1)頁55
- (13) 前掲書(1)頁55

【参考文献】

- (財)公園緑地管理財団編『子どものための公園づくりガイドライン』財務省印刷局、2001
- 遊びの価値と安全を考える会『もっと自由な遊び場を』大月書店、1998
- 鈴木敏、澤田晴委智郎『公園のはなし』技報堂出版、1993

A Study of Effective Use of the Urban Park

: From a Viewpoint of Children's Playing Space and Community Welfare

Noriko KAWAKITA

The park has played various roles in the community and has always been affected by the life of the people it serves. However, situations around parks have changed since the law was revised in 1993 and therefore may need revision again.

This study investigates suitable park design from the point of view of the needs of the community and especially from the point of view of the younger generation in the community.

It is often pointed out that there is urgent necessity to take action to support children's play activities. Making secure playing space in the community could be a first step in the solution to that problem while keeping in mind that the presence of an adult while the child is at play is important to the psychological as well as the physical security of the child.